日蓮大聖人御書全集

上野殿御返事（うえのどのごへんじ）

（塩一駄供養の事（しおいちだくようこと））

新版
1881
〜
1882

上野殿御返事（塩一駄供養の事）

弘安元年（’78）9月19日　57歳　南条時光

塩一駄・はじかみ、送り給び候。

金多くして日本国の沙のごとくならば、誰かたからとしてはこのそこにおさむべき。餅多くして一閻浮提の大地のごとくならば、誰か米の恩をおもくせん。

今年は正月より日々に雨ふり、ことに七月より大雨ひまなし。このところは山中なる上、南は波木井河、北は早河、東は富士河、西は深山なれば、長雨・大雨、時々日々につづ

くあいだ、山裂さけて谷埋をうずみ、石流ながれて道防をふせぐ。河猛たけくして船渡わたらず、富人なくして五穀乏ともし。商人なくして人集あつまることなし。七月なんどは、塩一升を銭百、塩しお五合を麦一斗にかえ候替いしが、今は全体ぜんたいしおなし。何をもってかかうべき。味噌絶みそもたえぬ。小児乳のちをしのぶがごとし。

かかるところに、このしおを一駄給びて候御志、大地厚よりもあつく、虚空広よりもひろし。予が言は力及ぶべからず。ただ法華経と釈迦仏とにゆずりまいらせ候。事

多しと申せども、紙上にはつくしがたし。恐々謹言。

弘安元年九月十九日　　日蓮　花押

上野殿御返事